

令和 2年 8月 16日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号201980408

氏 名 河野 碧

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名ヨーク (国名イギリス)
2. 研究課題名 (和文): イギリス美術の文脈におけるジェームズ・マクニール・ホイッスラーの肖像画考察
3. 派遣期間: 令和 元年 8月 26日 ~ 令和 2年 8月 13日 (353日間)
4. 受入機関名・部局名: ヨーク大学(University of York, Department of History of Art)
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【研究内容】

19世紀の後半にパリやロンドンで活躍した画家ジェームズ・マクニール・ホイッスラーは、1870年代以降肖像画を盛んに制作した。それらは共通して全身像で等身大という形式をもち、モデルの容姿やその背景の描写が非常に簡略化されている。こうした要素はホイッスラー以前の肖像画の伝統に照らすと極めて特異であったが、今まで十分に論じられてこなかった。そこで本研究は、ホイッスラーの初期の代表作と言える、《黒のアレンジメント：フレデリック・レイランドの肖像》(1870-73年)と《肌色とピンクのシンフォニー：フランシス・レイランドの肖像》(1871-74年)に焦点を当てケーススタディを展開した。考察するにあたり、19世紀イギリスのジェンダー観、肖像画というジャンル自体の定義や歴史、ファッションなど、様々な観点を参照した。

【研究状況】

上記2点の作品が描かれた時期は、ホイッスラーがロンドンでの活動に専念していた期間に当たるため、イギリスの同時代の画家の肖像画との比較からホイッスラーの肖像画の特異性、それが生み出された背景を考察し、英語でのレポートを作成した。グラスゴー大学図書館の特別閲覧室に保管されている資料をコピーし、作品の依頼状況や細かな来歴等の基本的な情報についても裏付けを取った。コロナウイルスの流行でアメリカでの調査が保留となっているが、代わりに同地の美術館学芸員と連絡を取り、レイランドの肖像画についての詳細が記録されたファイルを入手した。現在はこれらの資料をまとめ、今後の研究の土台となるよう議論を洗練させている。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【研究成果発表等の見通し】

指導教授のもとで制作した2稿のレポートを翻訳し、今年11月の美術史学会で発表し、その後学会誌に論文として投稿したいと考えている。これはいずれ博士論文の一部とする予定である。また、派遣先で開始した調査についてはさらに内容を発展させ、受入先であったヨーク大学の美術史学科が刊行する *Aspectus* という雑誌に投稿することを目指している。

【今後の研究計画の方向性】

レイランド夫妻の肖像画について調査した結果、ホイッスラーの描く肖像画を考察する際、装飾性(色彩や線といった絵画の形式の洗練)及び、記述性(肖像に描かれるモデルの身体的、精神的特徴を写し取る写実性)という2つの基準が有効ではないかという仮説を立てた。加えて、縦に長く横幅の狭いキャンバスに全身像の人物を嵌め込むような構図が、同じく等身大で全身像という形式を取っているにしても、グランド・マナー(すなわちレノルズやゲインズバラといった画家たちが確立した、18世紀イギリスで流行の様式)の肖像画と大きく違うという点に気が付いた。この過去の肖像画とは一線を画すホイッスラーの構図、フォーマットの選択は画家によって意図された展示空間と関連しているのではないかと仮定している。この観点を基軸として、他の等身大且つ全身像の肖像画のケーススタディを進めるつもりであり、現在は男性をモデルとしている作品に焦点を絞っている。最終的には、ホイッスラーの肖像画を同時代の文脈の中に位置づけるとともに、近代肖像画史における意義を明らかにしたい。

具体的な手順としては、ニューヨークのフリーア・ギャラリーやワシントンD.C.のナショナル・ギャラリーなど、ホイッスラーの肖像画を多数所蔵している美術館へ作品を実見しに行く、加えて、ホイッスラーの伝記作家ペネル夫妻が遺した資料がアメリカ議会図書館に保管されているため、合わせて調査をする予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムに採用されたことで、まず19世紀イギリス美術を専門とするエリザベス・プレットジョン教授から指導を受けることができた。受入先ではおよそ1ヶ月に1度の研究の経過報告が義務とされていた。報告書を書いて提出するごとに丁寧なフィードバックをいただき、参照すべき文献や資料の所在についてご教授いただいた。等身大で全身像という肖像画の形式に着目した点が先行研究がない分野で新しいとの評価を受けたことにより、研究の方向性が派遣以前と比べはるかに確かなものとなり、博論執筆に向けての重要な基盤となった。現在も定期的に連絡を取り、研究成果発表の内容について相談をしている。またヨーク大学に関連書籍が多数所蔵されていたことも調査を進めるうえで非常に有益であった。

次に一次資料へのアクセスの良さが利点として挙げられる。テート・ブリテンでは19世紀のイギリス美術を数多く見た。またヴィクトリア&アルバート美術館では19世紀当時の美術雑誌を閲覧した。グラスゴー大学付属の美術館及び図書館には、研究対象である画家の素描、本人が収集した雑誌や新聞の切り抜き、所蔵していた写真、出版されていない関連論文などが所蔵されていた。それらはスキャンを取って保管しており、今後の研究にも役立てるつもりである。グラスゴーの特別閲覧室に訪れるのは初めてだったため、機関の利用方法も知ることができた。必要となればまた赴いて資料を収集したい。

派遣先では自分の研究に関連するシンポジウムや講演会を拝聴する機会にも恵まれた。その場に集まった研究者や登壇者と話すことで、大いに刺激を受けた。これは受入先に一定の期間滞在していたからこそ得られた経験であった。また研究室の院生とも交流し、人脈を広げることができた。プレットジョン教授のもとには、イギリスの近代美術を専門としている修士、博士の学生が多く、様々な視点、関心を知り、示唆を受けられたことは自身の研究の方向性を再考する大変良い契機となった。